

聖書：マタイ 4：18～22

説教題：わたしについて来なさい

日時：2016年12月18日（朝拝）

イエス様の公の宣教が前の17節から始まりました。「この時から、イエスは宣教を開始して、言われた。『悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。』」この宣教の歩みを進めるに当たって、まず弟子を求められたというのが今日の箇所です。イエス様はここでガリラヤ湖のほとりでペテロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレをご覧になり、弟子として召されます。次いでヤコブとその兄弟ヨハネもご覧になり、弟子として召されます。彼ら4人はイエス様の召しを受けて直ちに従います。私たちはこれを見て驚きます。どうして彼らはこんな一言で、すべてを捨ててイエス様に従って行けたのだろうか。彼らはこの時、イエス様に初めて会ったのだろうか。それとも前からイエス様を知っていたのだろうか、と。他の福音書を参照する時に分かることは、実は彼らがイエス様に会ったのはこの時が初めてではないということです。ヨハネの福音書1章を見ると、この4人の内、アンデレとヨハネはバプテスマのヨハネの弟子であったことが分かります。彼らは洗礼者ヨハネがイエス様を指して、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と証言するのを聞いて、イエス様について行き、イエス様と一緒に時を過ごしました。またアンデレは兄弟シモンをイエス様のところへ連れて行き、シモンはその時、イエス様から「岩」という意味のペテロという名前をもらいました。その彼らは自分たちの先生であるヨハネが捕えられたことと関係していたのでしょうか。この時、ガリラヤに戻って漁をしていました。そこにイエス様が来られて彼らを弟子として召されたのが今日の箇所なのです。

もう一つ、今日の箇所との関係で問われるのはルカ5章の記事です。ルカ5章にはペテロたちが一晩中漁をして一匹も魚が取れなかったのに、イエス様が来られて、「深みに漕ぎ出して、網をおろして魚を取りなさい。」と言われた記事が出てきます。ペテロがそのことばに従ったところ、何と舟が沈みそうになるほどの大漁となり、ペテロはイエス様の足元にひれ伏して、「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから。」と言います。するとイエス様は彼に「こわがらなくてもよい。これから後、あなたは人間を取るようになるのです。」と言われました。果たしてこれは同じ出来事なのでしょうか。それとも違う出来事なのでしょうか。色々な意見がありますが、どちらであっても意味深いと思います。もしこれらが同じ出来事だとするとどうでしょ

うか。マタイは今日の箇所では省略していますが、実はルカが記しているような状況がそこにあったこととなります。その場合、彼らはまず自分の罪を自覚させられるというステップを踏んでから導かれて行ったこととなります。聖書でしばしば人が主の働き人に召される時はそうです。イザヤもパウロも、「もう私はダメだ！」と自分に絶望した時、主からの「わたしはあなたを用いる」との召しを与えられた。それと同じ導きがここにもあったこととなります。

一方、ルカの記事とは別だとするとどうなるでしょうか。その場合、彼らは今日の箇所に記されているようにしてイエス様の弟子としての歩みを始めた後で、ペテロが己の罪深さを悟ったこととなります。そしてその時、イエス様は再び「あなたは人間を取るようになるのです。」と、先にお語りになった言葉を繰り返して確認された。イエス様は復活後に、意気消沈していた弟子たちに息を吹きかけて、新しく使徒として任命する記事が出てきます、そのように主が一度与えた召命を事あるごとに確認し、確かなものにして行ってきたプロセスの一つとして見る事が可能です。いずれにせよ、この4人が召される背景にはこのようなプロセスがあったのです。何の脈絡もなく、いきなりイエス様からことばをかけられ、思い付きで従ったのではなく、むしろ必要な準備を経て、よく考えてわたしについて来るように！と主は招かれたのです。

さてこのことを踏まえつつ今日の箇所を見て行きたいと思います。今日の箇所が私たちに語っていることは何でしょうか。それはまずイエス様は宣教の働きを進める際、共に働く者たちを求められるということです。なぜでしょうか。助けてもらいたいからでしょうか。一人ではとてもできそうにない仕事だからでしょうか。そうでないことは弟子たちがこの後、どんな助けをしたかを考えてみれば分かります。彼らは重要な場面では良く眠りこけていたのではなかったでしょうか。またどこまでもあなたに従って行きますと誓約しながら簡単に主を見捨てたのではなかったでしょうか。そして肝心の時に愛する友に裏切られる悲しさをイエス様に味わせたのではなかったでしょうか。ある時、ペテロがイエス様を守ろうとして剣を抜いた時、イエス様は彼をいさめてこう言われました。「わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今わたしの配下に置いていただくことができないとでも思うのですか。」ですからイエス様の側の理由でイエス様が弟子を求められたのではないのです。それはむしろ私たち人間のためでした。ある意味ではイエス様がお一人で全部をやってしまう方が簡単だと思います。しかしそれは神の御心にはかなっていません。聖書が示している救いは、私たちがただ

受身で、お客さんのようにして天国に入れてもらうというものではありません。そうではなく、救いへ導かれた私たちも神の御心のためにともに働き、ともに労した者として天国へ入るといのが救いです。創世記1章に人間は神のかたちに造られ、神の御心にかなうように世界を治める責任が与えられたと記されています。ですから私たちの救いは、私たちが神の栄光のために働く者となるという本来の使命への回復をも含みます。そしてそのように神の栄光を現す生き方に、真の喜びと幸いがあります（ウ小教理問答問一）。

ではイエス様はこの時、どんな人を弟子として召されたのでしょうか。イエス様がこの時召されたのは、ガリラヤ湖で働く漁師たちでした！神の国建設という大プロジェクトのために、中央のエルサレムから頭脳明晰な学者たち、エリートたちを引き連れて活動を開始したというのなら分かります。しかしイエス様が最初の弟子とされたのは何と田舎の漁師たちでした！後にペテロが雄弁に宣教する姿を見て、人々は彼が無学の普通の人であるのを知って驚いたという言葉が出てきますが、そういう普通の人々です。いや暗やみの地にいたガリラヤ人です。すなわち神は暗やみの地に座していた人々に光をもたらして下さるだけでなく、そんな彼らをご自身の働きのために用いて下さる。これが神様の方法なのです。1コリント1章26～27節：「兄弟たち。あなたがたの召しのことを考えてごらん下さい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。」 実際、どうしてこのような取るに足りない人々から始まったキリスト教は、ここまで世界に広がることができたのでしょうか。例として当時のローマ帝国を引き合いに出すと分かりやすいと思います。ローマ帝国の中枢にいた人々はペテロやヤコブよりもはるかに賢く、有能な人たちだったでしょう。しかし彼らの国は今、どこにあるでしょう。一時は隆盛を誇ったその国もとうの昔に滅びています。しかしガリラヤの漁師たちを最初の弟子としたキリストの国は今日もお生き延びており、いや全世界に広がっています。ここに神の驚くべき恵みが雄弁に証しされているのではないのでしょうか。神は弱いたち者を用いてご自身の国を建てられるのです。それは誰をも誇らせないためです。

ではどのようにして神は弱い者を用いて下さるのでしょうか。その秘訣が19節のイエス様の言葉の中に見られます。「イエスは彼らに言われた。『わたしについて来なさい。あなたがたを、人間を取る漁師にしてあげよう。』」 イエス様はまず、「わたしについ

て来なさい。」と言われました。これはイエス様と共に歩む生活への招きです。その共なる生活の中で、イエス様が彼らを人間を取る漁師にして下さる。この「人間を取る漁師」という表現は、この4人が皆、漁師だったことと関係していると思います。聖書の中には神の国のために働く人のイメージとして色々な表現が出てきます。羊飼いなというイメージもありますし、畑で刈り取りをする人のイメージもあります。もし相手が家畜を飼う人だったら、イエス様は羊飼いのイメージで語ったでしょうし、相手が農業を営む人だったら刈り入れのイメージで語ったかもしれません。しかしこの4人は漁師だったので、イエス様はこの表現を用いられました。そしてそれは彼らに良く訴える言葉だったに違いありません。

彼ら4人は魚取りのプロでした。どうやったら魚をうまく取れるか、舟はどのように近づけるべきか、どんな時間帯が適しているか、また様々な気象の変化にどう対処すべきか、・・・彼らは長年の経験を経て熟練しています。しかしこれからは人を取るのだとイエス様は言われました。すなわち人々をすなごって天国へ導く仕事をするということです。あるいは滅びの海でもがいている人々に手を差し伸べ、神の国へと救い上げ、勝ち取る働きをする。魚を取るのなら人並み以上に知識と経験がある彼らですが、相手が人間となると話は違って来ます。漁師は漁師と言っても次元が違います。果たして魚取りの名人が、即、人間取りの名人になれるのか。しかしイエス様は「人間を取る漁師になりなさい」と言われたのではなく、「人間を取る漁師にあげよう」と言われました。イエス様がそう導いてくださるのです。だからわたしについて来なさい、と仰られた。つまりイエス様はご自身との交わりの中で彼らを訓練し、造り変え、その働きができる者へ導いてくださるのです。ですから大切なことはイエス様について行くことです。

果たしてこの4人はどうしたのでしょうか。今日の箇所が強調していることは、イエス様の恵み深い召しと共に、この彼らのすぐさまの服従でしょう。それは20節の「彼らはすぐに網を捨てて従った」という姿、また22節の「彼らはすぐに舟も父も残してイエスに従った」という姿に示されています。先に触れましたように、これは彼らが良く考えずに、一時の感情で従ったということではありません。彼らはもともとバプテスマのヨハネの弟子だった人たちであり、神の国待望の心を持っていた人たちでした。そしてヨハネに教えられて、この方こそ来たるべきメシヤだと知っていました。ですからその方からの招きは御国建設プロジェクトへの招きだと彼らはすぐ理解したのです。そし

て喜びをもって従ったのです。しかし私たちが学び取るべきは、彼らがこのキリストの招きを第一に選び取るために、他のものをすべて後に捨て置いたことでしょう。彼らが脇へ置いたものはまず「網」であり「舟」でした。これは漁師の生活道具であり、いのちの次に大事なものでしょう。しかし彼らは主に従うことを第1として、これらのものをも脇に置きました。また彼らは「父も残して従った」と22節にあります。これはもちろんキリスト教は親を大事にしないということではありません。十戒の第5戒に「あなたの父と母を敬え」とあります。しかしイエス様はある箇所でこう言われました(10章37節)。「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。」親子の愛、あるいは家族同士の愛は人間関係における基本的な関係であり、大事にすべきものです。しかしその最も大切な関係さえも、主に従うことの前には道を譲らなければならない。ちなみにここでヤコブとヨハネは父を一人で放り残したわけではありません。マルコの福音書の平行記事を見ると、「雇い人たちといっしょに」と書いてあります。もし父が病気で誰も見る人がいなかったら、それでも放っておくとはイエス様は言われなかったと思います。イエス様はペテロの姑が熱病で床についていた時、彼女のところに来て彼女を癒されたお方です。また十字架上でご自身が苦しみの真只中にある時に、母マリヤの今後のことを思い、その世話を弟子ヨハネに託した方です。イエス様ご自身が家族を大事にされたことは聖書の色々な箇所から分かります。しかしその最も大事な関係さえも、私たちが神に従うことの上に行くようであってはならない。「神を愛せよ」が第一の戒めであって、そのもとで第二の戒めである「あなたの隣人を愛せよ」が考えられて行かなければならないのです。第一の戒めを犠牲にして、人間的に第二の戒めを優先するのは聖書が言うところではないのです。

以上、今日の箇所は第一義的には直接献身へと主が彼らを召された箇所です。しかしここにある原理はすべての人に当てはまるでしょう。ある人は御心に従って直接献身へと導かれます。ある人は同じ神の御国実現のために様々なこの世での働きに召されます。どちらも神からの召しであり、神の御国のために働くことができます。大切なことはどんな働きであっても、イエス様からの召しに従って主の御国のために身をささげているかということです。そのために妨げとなるものを後ろに捨てて、主に従う歩みを大切に選び取っているかということです。それらを脇に置くことにおいて、私は果たしてこの時の彼らのようであるだろうかということです。

イエス様はただ御国のための働きをせよとは言っておらず、まず「わたしについて来なさい」と言われました。私たちにとって大切なことは、この「わたしについて来なさい」というイエス様の言葉にまず聞き、従っていくことでしょうか。それは具体的にはどうすることでしょうか。その一つは礼拝を大事にすることでしょうか。週の初めの日の礼拝をささげることが妨げようとする様々な理由や力があります。しかしイエス様は「わたしについて来なさい」と言われる。この御言葉を前にして、私たちには捨てるべきものがあるかもしれません。これまで上に持って来ていたけれども、第二、第三とすべきものがあるかもしれません。それらを脇に置いてイエス様との交わりを第一に求めることがイエス様について行くということではないでしょうか。またそれは日々、個人的に聖書を読み、祈ることをも意味するでしょう。イエス様について行くとはイエス様との交わりを大切にすることです。そのイエス様の御心はやはり聖書を通してでなければ分かりません。また聖書を読むだけでなく、祈りを通してイエス様とお話することが大事でしょう。このイエス様との交わりを後回しにしようとする様々な誘惑も私たちの毎日の生活にはたくさんあります。それらを後ろに捨て置いて、イエス様との交わりを大切な時間として選び取るのです。そしてイエス様とただ交わるだけでなく、実際生活の中でイエス様に従うことがイエス様について行くことでしょうか。そうしたイエス様との交わりの生活、共なる生活の中で、イエス様は私たちを養い、育み、ご自身の御国のために有用な働きをする者へと導いて行って下さるのです。

イエス様は 17 節で「天の御国が近づいた」と言われました。そう言われてから時間が経っている今日は、いよいよその日が近い！という状況にあります。果たして私たちはその日に目をあげて、その御国の完成のために生きようとする者でしょうか。それともやがては過ぎ去り、滅ぼされるこの世のこのために自分のエネルギーと時間をむだに費やす生き方をしようとしているのでしょうか。イエス様はご自身と共に御国を来たらせる働きに私たちを招いておられます。そのために「わたしについて来なさい」と声をかけて下さっています。私たちはそのお言葉に聞いて、何よりもイエス様と共に歩むことを大切にしたい。そしてそれを第一に選び取ることによって、そこまで迫って来ている神の国完成のために用いて頂ける主の弟子の光栄な歩みへ進みたいと思います。